

| | |
|------------------|---|
| Title | リカルド才略伝附年譜 |
| Sub Title | |
| Author | 小泉, 信三 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1921 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.6 (1921. 6) ,p.825(65)- 842(82) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210601-0065 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

■ 商法研究參考書 ■

| | | | |
|----------|---------|---------|-----------------------|
| 松本 丞治博士 | 私法論文集 | 全三卷 | 各定價金五圓 送料金拾八錢 |
| 柳川 勝二學士 | 商法論綱 | 完 | 定價金六圓五拾錢 内地送料金貳拾四錢 |
| 寺尾 元彦教授 | 商法原理 | (第一卷) 完 | 定價金貳圓八拾錢 内地送料金拾八錢 |
| 西本 辰之助教授 | 商法總論 | 完 | 定價金貳圓五拾錢 内地送料金拾八錢 |
| 松本 丞治博士 | 會社法講義 | 完 | 定價金四圓 内地送料金拾八錢 |
| 猪股 淇清學士 | 株式會社本質論 | 完 | 定價金四圓 内地送料金拾八錢 |
| 青山 衆司博士 | 保險契約論 | 上卷 | 定價金四圓 内地送料金拾八錢 |
| 須賀 喜三郎學士 | 手形法論 | 完 | 定價金壹圓貳拾錢 内地送料金六錢 |
| 市村 富久博士 | 海商法論 | 完 | 定價金貳圓 内地送料金拾貳錢 |
| 加藤 正治博士 | 破産法講義 | 完 | 定價金五圓五拾錢 内地送料金拾八錢 |

(東京) 東洋堂 (神樂坂) 店書堂松巖 (田町)

雜 錄

リカルド才略傳

附年譜

小泉 信三

David Ricardo の生涯に就ては吾人の知るところ甚だ尠し。傳記の資料として據るべきものなるの書簡集(Letters to J. B. Say. Oeuvres diverses de J. B. Say 1848, pp. 406-429—Letters of D. R. to T. R. Malthus 1810-1823. Edited by J. Bonar, 1887—Letters of D. R. to J. R. McCulloch 1816-1823. Edited by J. H. Hollander, 1895—Letters of D. R. to Hutches Trower and Others 1811-1823. Edited by J. Bonar and J. H.

Hollander, 1899—Letters written by D. R. during a Tour on the Continent, privately printed, Gloucester, 1891)の外には、僅かにその兄弟の筆に成れりて想像せらるる(McCulloch) "Account of the Life of Mr. Ricardo" in the "Annual Biography & Obituary for 1824" 及び McCulloch などの Ricardo 全集の巻頭に載せたる Life and Writings of Mr. Ricardo 及び Alexander Bain, James Mill, 1882 などの他數書中に散見する Ricardo に関する記事の断片があるに止まらうが、後に述べる Edwin Cannan 及び Hansard の精査及び彼の議會中に於ける行動を詳述し (Ricardo in Parliament, Economic Journal for June & September, 1894, reprinted in *E. Cannan*, The Economic Outlook 1912, pp. 87-137) 及び J. H. Hollander が前人の利用せらるる書簡集などの他の私文書を涉獵し David Ricardo. A Centenary

Estimate 1910 を著し、始めて Ricardo の家系を明にする共に McCulloch 等が記事の誤謬不精確の或物を匡正しを得たり。Ricardo の閱歷に關して讀むべきものは以上諸書のみ。本編は Hollander, McCulloch, Cannan, Bain 及び K. Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, 1905 の抜鈔に外ならざるものなり。

David Ricardo は一七七二年四月十九日倫敦に生る。父 Abraham Israel Ricardo は和蘭より移住歸化せる猶太人なり。更に其家系を遡れば祖先は宗教的迫害の爲め西班牙半島を逃れて、居を伊太利 Livorno に移したる猶太人團中に求むることを得べし。Amsterdam の Ricardo 本家に存する記録によれば Livorno の産 Benjamin Israel Ricardo の兄 David Israel Ricardo (165

2-1721)なる者一六九二年同地の Estrela de Joseph Amadios を娶り、二十 Samuel Israel Ricardo 及び Joseph Israel Ricardo を生む。後者は我が經濟學者 David Ricardo の祖父なり。而して Ricardo の一族が他の猶太人と共に再び難を避けて和蘭に定住せしは、略ぼ此祖父の生れたる一七〇二年の頃なりしならんを謂ふ。Joseph Israel は一七二七年 Hanna Abbas を娶り、四男二女を得たり。一七五〇年に生れたる季子 Abraham Israel 即ち經濟學者の父なり。

一六六〇年英吉利航海條例の制定は Amsterdam に於ける猶太商人に打撃を興ふること甚しく、同時に英人の猶太人を待つと漸く寛大なりしかば、十八世紀を通じて猶太人の居を和蘭より倫敦に移すもの相踵げり。Ricardo の一族は再び此移動に参加せるものとす。Abraham Israel Ricardo が倫敦に來りし年月は明かならざれど

も、晚くも一七六四年その十四歳の時なりしならんと云ふ。その一七七〇年他の猶太人團中の有力者と共に英國歸化の請願をなし、翌年特許を得たるとは公文書の記録するところなるが、此請願に關聯して彼れは「過去數年間 (for some years past) 大武烈顛國に居住したり」と記せり。彼は勉強節約と天賦の能力と、及その妻 Abigail de Valle を通じて得たる有力なる緣故とにより、間もなく商人及び仲買人としての地歩を堅め、一七七三年に至りては、倫敦市參事會が十二を限りて猶太人團に特許せる、仲買人の株の一を譲受くることを得たり。David Ricardo が「數多き家族の第三子」として生れたるは此の前年の事なりとす。

David Ricardo が少時先づ英國に於て、次で Amsterdam の伯父の許にて授けられたる教育は、全然實用を主としたるものにして、「古典文學は

その部分をなさざりき。」和蘭に留まると二年、(Ricardo が和蘭に於て教育を受けたる年時に就ては疑問あり。Maria Edgeworth が一八二二年人に與へたる書簡によれば、Ricardo はその九歳の時和蘭に在りし事を語るも、その大陸巡遊中の書信には「十二の年より十三まで」同國に在りしと記せり)にして歸國し、十四才の時以後父を助けて實務に従事したり。此時以後に於ても、父は David が業務の餘暇教師に就て、好むところの學を修むることを許したりと傳へられ、その自然學に對する興味及び後年 Fonteyraud が遺族より聞ける、彼の沙翁に對する傾倒は、或は端を此に發するものならんと雖も、固より秩序なき散漫なる學修に過ぎず。且その家庭内に於ける氛圍氣は、所謂無利無益なる思辨を阻害するが如きものなりしと云ふを以て觀れば、彼れは「その少年の頃より抽象的推理の嗜好を示し、彼

の性格の特徴たる興味の主眼をその根柢まで究め、それに關する凡べての意見をばその心の確信に従つて立つるの決意を示し」(McCulloch)たるに拘らず、Ricardoが少時受けたる教育は決して彼れの理論家たるべき傾向を助成するものに非ざりし事明なり。之より先き父 Ricardoの業務は漸く商品買買より轉じて、爲替手形、有價證券の賣買を主とするに至りしが David が財務上の能力は父の信用を博し、彼をして間もなく完全なる責任を帯びて業務に當らしむるに至れり。Davidが當時既に成人の風ありて、善く父母の信頼を嬴得たりしは、年十六の時父母は彼れに二弟(？)を托して和蘭に赴かしめ「毫も懸念を感ぜざりし」と云ふに徴して知るべし。(Annual Register and Obituary for 1824)斯の如く Davidの業務上に於て漸く重用せられ、事務を即決專行するの必要漸く大なるに従ひ、早晚父子の衝突

あるべきは或は避難き勢なりしならん。然れども Ricardo 父子の間に業務上政治上の意見に於て如何なる相違ありしかは明かならず。吾人が知るところは David が一圭哥兒教徒 Edward Wilkinson Esq. の女 Priscilla Ann を愛し、一七九三年父祖の宗教を守ること嚴格なる父の怒を顧みずして、遂に之と結婚したる爲め、父子義絶するに至りし一事是なり。而して吾人は後年 David Ricardo と父の家族との關係親善なりし事實を知るも、父其人と子とは終に和睦することなくして終りたるが如し。然れども斯くして獲たる Priscilla Ann は目輝き態度親切快潤なる、嬌飾なく私心なき婦人(Maria Edgeworth の評語)にして Ricardo をして善く「純粹無雜なる家庭の幸福」を享くることを得せしめたり。

父の家を去れる Ricardo は今獨力を以て自家の運命を開拓せざる可からざるに至れり。幸に

して株式仲買間に信用ある Ricardo の家名と、David 其人の尊敬すべき人物性格と及その父の家を去れる同情すべき事情とは、株式取引所に於ける有力人士を動かして、彼の爲に援助と奨励とを吝しむ事なからしめたり。斯くして彼は株式仲買人として意想外の成功を博し、數年にして(恐らく年未だ二十六に達せざるに)經濟上の獨立に就き憂ふることを須るざるに至れり。Annual Biography and Obituary for 1824 に於ける Ricardo 傳の筆者は彼れの致富の才能に就き記して曰く致富の才能は多く尊重せられずと雖も、R 氏(Ricardo)は異常なる力量を恐らく如何なる事に於ても、その業務に於てせるより發揮せることなかるべし。業務の有ゆる複雑なる細目に對する彼れの完全なる知識、數字及び計算に對する彼れの驚くべき敏慧、その關係せる莫大なる取引を何等努力の態なく處理する能

力、彼の冷靜と判斷とは(彼に取つて)好運なる公事件の綜合とも相結合して、彼をして株式取引所に於ける凡べての同輩を遙かに背後にして、常に資産上に於てのみならず、一般的名望及び聲價に於て、取引所に於ける何人が嘗てしたるよりも無限に高く昇ることを得せしめたり。此等の才能が彼等の儕輩に與へたる印象は、彼等の中の最慧眼なる數人をして、彼れの著名となるに先だつ事久しく、嘆賞の餘り彼れの他日必ず國家に於ける最高地位の或物を占むべき事を預言せしめたりと。(McCulloch, p. XVII)

物質上の懸念漸く去るに及び Ricardo はその餘暇の一部を自然科学(數學化學地質學礦物學)の研究に捧げ、傳ふる所によれば、或は電氣實驗を試みて人に示し、或は他に先じて其家に燈用瓦斯を採用し、或は鑛物標本陳列の爲に實驗室を設け、又一八〇八年その前年創立せられたる

地質學協會 Geological Society に入りて會員となれり。然れども是等の自然科學が Ricardo の心を占めたるは、彼が經濟學研究の興味を解するに先だちてのことのみ。彼れの一度經濟學に捉はるゝや、自然科學の研究は假令「全然放棄」(Mc Culloch)せられざるも復た甚だ顧みられざるに至りしものゝ如し。

Ricardo が一七九九年療養の爲め病妻を伴ひて Bath に滞在中、一日偶々 Wealth of Nations を見て、經濟學研究の志を起せりとの逸話は Annual Obituary の筆者之を語り、McCulloch も之を傳へてより、廣く人の知るところとなれり。而して別に此逸話を傳ふるものに Hobhouse の手記あり。曰く、「三月二日(一八二二年) Harribon と共に會食す。來客甚だ多く、馳走美事なり。予は Ricardo の隣席に坐せしが、彼は予にその妻の病中偶々一日 Bath に在り廻覽書庫

動搖、金紙價の差最も甚だしかりし十年にして、手腕ある投機者の爲めには巨利を博すべき絶好の機會を供したりき。

Ricardo は此期間に於て、單に一個の資力ある株式仲買人より、富裕なる英國財界の有力人物に進み遂に所謂財界有力者のみを以て組織せる公債引受人の一員たるに至れり。而して Ricardo は業務を行ふに當つて、常に忠實正直を以て顯はれたるのみならず、また公共の精神を以て之を爲したるとは Pascoe Grenfell が議會に告げたる(一八一九年五月十三日)一八一四年時の藏相 Vansittart が公債引受團と會見して Grenfell の案を實行するの適否を議したるに、皆悉く之を不可となし、千二百萬磅の代りに二千四百萬磅の募債を薦めたるに、Ricardo 一人のみ意見を異にし、「彼にして自家の利益をのみ考ふることはその同業者に同意せざる可からずと雖も、國の

(貸本屋)に於て「Adam Smith なるものを見、一二頁を披見して之を家に送るべきことを命じたるときまで、曾て經濟學に思及びたることなかりしと語れり。彼れはそれを好むこと甚しく遂に此學に對する趣味を養ひ得たるなり」と。(Lord Broughton, Recollections of a Long Life (1909), vol. ii p. 179) 此逸話の眞偽は之を疑ふべき理由なしと雖も、猶必ずしも深く之を論ずることを須むざるべし。たゞ吾人は經濟問題に對する實際的經驗と觀察力とある Ricardo が、壯年にして業務上の功既に遂げたる時、一經濟學書の精讀によつて斷然心を經濟學的思辨に傾くるに至れる事を知らば足れり。然れども彼が經濟學に志してより、その最初の述作を以て世に見ゆるまでには猶ほ十年の歲月經過す。この十年間は奈翁戰爭、英蘭銀行の不賢明なる政策、大陸封鎖、兎作の連續に依て、物價、外國爲替の

利益を商量すべしとせば彼は減債基金の適用と僅かに千二百萬磅の募債とを勸告すべし」と答へたるの事實を以て之を推すことを得べし。

一方 Ricardo の經濟學的興味は此間毫も減退することなく持續せられたるものゝ如し。今十九世紀初より凡そ十年間に公刊せられたる經濟書の重なるものを擧ぐれば Boyd, Letters to Pitt, 1801.—Thornton, Paper Credit, 1802.—Malthus, Essay on the Principle of Population 2nd ed. 1803.—Byng Ham Colonial Policy, 1803.—Lord King, Bank Restriction 1803.—Lauderdale, Public Wealth 1804.—Purnell, Currency in Ireland, 1804.—Foster, Commercial Exchanges, 1804.—Lord Liverpool, Coins of the Realm, 1805.—Macpherson, Annals of Commerce, 1805.—William Spence, Britain Independent of Commerce, 1807.—J. Mill, Commerce Defended, 1807.—Torrens, Ec-

onomists Refuted, 1808.—Chalmers, National Resources, 1808 等あり。Ricardo は恐らく Wealth of Nations に次で、是等の書の或物より刺戟を受くることありたるならん。而して彼が Francis Horner 及び後に James Mill の寄稿せる Edinburgh Review の愛讀者たりし事に就ては確證あり。即ち彼は後に一八一八年一月 Huchies Trower に與へたる書簡の一節に「予は予が始めて君も亦予と同じく Adam Smith の著作及び Edinburgh Review に現はれたる經濟學に關する初期の論說の大愛讀者なることを發見して感じたる喜悅をよく記憶す。」と云へるなり。(Letters to H. Trower, pp. 45-6)

此頃に於て Ricardo が終生の友にして、彼れ
の思想並に私的生活の上にも重要な影響ありし James Mill を獲たる事を記せざる可からず。Mill は Edinburgh に於ける Dugald Stewart 門

Bentham を通じて Mill を知りたるにあらずして、Mill を通じて Bentham を知るに至れるものゝ如し。(Letters to H. Trower, pp. 1-2) Mill, Ricardo 二者の關係は經濟問題の研究を中心として速かに相知より親愛に進めり。一八〇九年 Morning Chronicle の社主兼主筆 Perry が Ricardo の通貨問題に關する手稿を見、切に勸めて之を紙上に公表せしめたるまでに、Mill は恐らく其間に中介せるならんかと云ふ(Hollander, p. 44)。而して同年八月二十九日此の The Price of Gold と題する無署名の寄書の發表せられたる時を以て Ricardo の生涯は一新時期に入れるなり。("Three Letters on the Price of Gold" by D. Ricardo. Edited by Hollander 1903 にして信ずべくんば McCulloch が第一の寄書の日附を一八〇九年九月六日とせるは誤謬なり。)

Ricardo をして其處女作を草せしめたるは不

下の一人にして、一八〇二年倫敦に出で、文筆を業とせしが、その初めて世の視聽を引くに至りしは、一八〇七年 William Spence が Britain Independent of Commerce を著し、英吉利國方の眞泉源は農業にあり、奈翁の封鎖恐るゝに足らずと主張し、Cobett も亦同應して世の歡迎を受けたるに對して、Spence 氏 Cobett 氏並に其他の商業は國富の泉源にあらざることを證明せんと試みたる議論に答ふる "Commerce Defended" を著はしたるに始まる。而して Ricardo は Mill とを相知るに至らしめたる媒介も亦此の書なり也。(J. S. Mill, Principles, ed. by Ashley pp. 562-3) Bain 氏の James Mill 傳に於て(七四頁) Mill の Ricardo との相知は、恐らく Bentham を通じて、一八一一年に始まると記せるは確證なきのみならず、Ricardo が Bentham に與へたる書簡(一八一一年八月十三日)に依れば彼は

換銀行券の増發に基づく、銀行券に對する地金の騰貴、並外國爲替相場の下落是也。一八〇八年の春以來英吉利經濟界には投機熱狂んにして、例の如く信用の膨脹物價の動搖之と相伴へり。英蘭銀行は一七九七年以來銀行券の兌換を停止せしが、此間絶えずその發券額を増加し來り、一八〇八年十一月に一七、四六七、一七〇磅なりしもの、翌年五月には一八、六四六、八八〇磅、更に同八月には一九、八一、三三〇に上り、而して標準純度(二十二カラット)の金一オンスの市價は、その造幣公價は三磅十七志十片半なるに、一八〇六、一八〇七、一八〇八年を通じて四磅に上り、一八〇八年の末より急騰して、一九〇九年中には一オンス四磅九志四磅十二志の間を上下せり。(市價四磅十志は造幣公價より高きこと十五半%なり)。而して大陸諸國に對する爲替相場も、亦一八〇八年末に近づきてより甚だ英國に

不利となり、一八〇九年及一八一〇年初の三ヶ月を通じて益々不利となれり。一八〇九年の後半年及び一八〇九年初の三ヶ月を通じて Hamburg 及び Amsterdam に對する爲替相場は爲替平準より下ること十六乃至二十%に及びたり。
 (The Paper Pound of 1797-1821. A Reprint of the Bullion Report. With an Introduction by Edwin Cannan 1919 pp. 3-5) Ricardo は是等一切の變態現象を不換銀行券の過發に歸し、銀行が發行券兌換の義務を負ふ限り、金の市價と造幣公價との間に大なる差額を生ずるの理なく、又本位貨幣の金屬を同ふする二國間に在りては爲替相場は正貨輸送費及び保険料に依て定められたる限界内に於てのみ動搖すべき筈なる事を示したるなり。此寄書は多くの反對論を喚起したるが、就中 A Friend to Bank Notes but no Bank Director なる匿名氏の攻撃に對して答辨

の必要を感じ、Ricardo は更に九月二十日主筆に宛て (To the Editor of the Morning Chronicle) R の名を以て第二の書を送り、Friend to Bank Notes また之に應じて第二の書を寄せ、之に對して Ricardo は十一月二十三日第三の書を以て答へ、新聞紙上に於ける應酬は之を以て終結を告げたり。何ぞ知らん此の匿名氏は Ricardo の友人 Hutches Trower なる也 (Three Letters on the Price of Gold p. 5)
 Ricardo の翌年の著 High Price of Bullion. A Proof of Depreciation of Bank Notes は彼の通貨問題に關する意見を一層秩序ある形に於て記述せんとして作られたるものにして、其緒論の日附は一八〇九年十二月一日に作れり。此小冊子は下院議員 Francis Horner を動かして、Horner を議長とする「地金委員會」の任命を見るに至らめたり。而して同年六月發表せられたるその報

告書を貫ける原理は、大體に於て Ricardo の小冊子は於て主張するところと同一なりき。所謂地金論争は一八一一年五月十五日、下院が Horner の決議を否決したるときを以て、その第一期を閉づるものなるが、今や此論争に於て Ricardo は「議會の調査を促がしたる直接の原因」として、又正貨主義の最も顯著なる戰士として其名を知らるゝに至れり。而して彼の名聲と討論家として技倆とは Charles Bosanquet の著 Practical Observations on the Report of the Bullion Committee 1810 に對して、Reply to Mr Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee 1811 を著して之を反駁せることに依て愈々發揮せられたり。Bosanquet は South Sea Company の理事にして、英蘭銀行の一役員たる有力なる實業家にして、其著は所謂理窟家の結論に對して、實際家の爲めに具體的事實と證

據とに基づきて抗議するものなりと稱したり。Ricardo はその證據を分析解剖反證し、謂は、敵地に於て敵の武器を以て之を倒したり。Ricardo の勝利は「完全無缺」にして Bosanquet の誤謬はたゞ「眞理擁護の爲めに現はれたる著者の技倆を證明する」爲めの用をなしたりと云ふ。
 經濟論家としての名顯はるゝに連れて Ricardo が交友の範圍は漸く廣く、その相往來せる友人の中に Malthus, Bentham, Place, Mackintosh, Thornton, The Horners, Whishaw, Hobhouse, Tooke, Warburton, Sharp, Lord Holland, Tennant, Dumont, Sydney Smith, Joseph Hume を數ふるに至りぬ。就中特記すべき者は Malthus との交誼なり。Ricardo は既に人口論第一版を讀みて、僅かに Wealth of Nations より得たる興味にのみ劣る興味を感じたりと云へり。(Letters to Malthus p. 107) 一八一〇年二月二人は既に相交は

ること切なりしが、(Letters to Malthus 第一信の日付は一八一〇年二月二十五日なり) 此素養職業性情を異にする二人は漸く相許すこと深く、Haileybury に於ける Malthus の家庭は屢々 Ricardo を、倫敦 Mile End 後(Upper Brook St. に於ける Ricardo の家は屢々 Malthus を客として迎へたり。二者は「相携へて真理を探求し、之を發見せるときは、何人が先づ之を發見せしかを問はずして歡聲を揚げたり」(Maria Edgeworth) 而して二人は屢々その説を異にしたるにも拘らず、その Mill-Ricardo の友誼に次ぐ親交は、纔かに Ricardo の死によつて絶たれたり。

一八一三—一八二四年の穀法案(穀價一クオター八十志以上に上らざる限り、外穀の輸入を禁止せんとする)の討議は、或は Malthus なども、猶ほ單獨に Ricardo を促がして、類似の著作を公にせしめたるならん。然れども彼が一八一五年世に

出したる Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock. Shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus's Two Last Publications: "An Inquiry into the Nature & Progress of Rent;" and "The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn." は Malthus への通信の直接の産物にして、翌年の作 Proposals for an Economical and Secure Currency; with Observations on the Profits of the Bank of England 1816 を亦 Edinburgh Review に於ける Malthus の批評に答へんが爲め草せられたる High Price of Bullion 第四版の附録に胚胎するものなり。彼れの大作 Principles of Political Economy and Taxation に至つては固より Mill の勧誘に負ふところ最も大なるものなりと雖も(Ricardo は Essay on the Low Price

of Corn を著すや一部を J. B. Say に贈り、且

加へたり。

つ一八一五年八月十八日附書中の一節に於て、「予は予の見解を充分詳細に説明せざりし爲め、我國に於ける幾多の人は予の説を了解せざる事を Mill 氏より聞知せり。而して氏は予に勸めて當初より一層詳かにその説明を企てしめんと試みつゝあり。然れども予は恐る此事業の予が力量の及ばざるころあるを」云へり。Letters to Malthus p. 92) Ricardo の興味を持續せしめ、彼をして能くその不得意なる執筆の勞に堪へしめたるものは Malthus への論争應酬なりしならん云ふ。Principles は識者には異端視せられ、俗人に取つては甚だ難解なりしが、一八一八年 McCulloch が Edinburgh Review 紙上に批評文を掲げ之を讚美してより漸く世に行はれ、一八一九年第三版、一八二二年第三版を出すに至れり Ricardo は就中第三版に重要な増補訂正を

Ricardo の純然たる著作時代は始めて Morning Chronicle に寄書したるときより、一八一九年議員となれるまでの十年間とす。一八一九年以後に於ける述作は、何れも彼の議員生活と直接關聯して書かれたるものなり。即ち McCulloch が認めて彼れの小冊子中最良のものとなし、是以外何等の著作なをも善く Ricardo を第一流經濟學者の間に伍せしむべし(XVIII), 又評せる On Protection to Agriculture, 1822 年 Ricardo も参加せる農業窮狀調査委員會(Select Committee on Petitions Complaining of the Distressed State of Agriculture) の小數報告とも見るべきもの Mill 及び Macvey の切望に應じて Encyclopaedia Britannica の附録に寄稿せる Essay on the Funding System, 1820 は議場に於て彼が反覆主張せるその課税及び公債に關する意見を説

明せるもの、又遺稿 Plan for the Establishment of a National Bank は兌換再始條件に關し、英蘭銀行の所爲に對し加へたる非難の續論に外ならざるなり。此外 McCulloch 編纂の「全集」に収録せられたるものに猶ほ一八二四年四月二十四日及び七月十七日の“Scotsman”に掲げられたる“Observations on Parliamentary Reform” “Speech on the Plan of Voting by Ballot” 及び全集に収録せられたるもの Speech on Mr. Western's motion for a Committee to Consider the Effects produced by the Resumption of Cash Payments, delivered the 22th of June 1822. 而して Ricardo が屢々言及せるもの Malthus に對し自家の立脚地を辯護せんが爲めに作れる Notes on Malthus (Letters to McCulloch p. 84 note; Letters to Malthus p. 172; Letters to H. Trower p. 136 seq.) の手稿に至つては終に傳はらざる

最後に Ricardo の議院生活に就て記せざる可からず。致富の志を遂げたる後土地を買ひて、田園に郷紳の生活を營むは、成功せる英國實業家の必ず履むべき常道なるが如し。Ricardo も亦一方に於て文名顯はれ、他方に於て財界有力者たる地位堅きに至り、一八一四年 Gloucestershire に美麗なる莊地 Gatcomb Park を買ひ、更に翌年、之より先き一八一二—一三年の頃 Mile End より移り營みたる Upper Brook St. の邸宅を別邸となし、生活の本據を Gatcomb Park に定むるに至れり。斯くして漸次其の資産を有價證券より土地に移し、一八一九年には株式取引所の會員たることを能めたり。而して Ricardo が一八一九年二月二十日愛蘭土の Portarlington より選出せられて議員となれることも亦「常道」を履めるものに外ならず。傳ふるところに依れば、此

選舉區の有権者は十二名なりしが、Ricardo は選舉區所有者 (Portarlington は代議士指名の實權或一人の手に存したる所謂 pocket borough の一にして、此に所有者と云へるは此の實權者を指すものなり) に二萬鎊を無利子にて貸附け無競争にて當選したるものにして、恐らく曾て選舉區及び選舉人を見たることなかるべしと云ふ。

(Cannan, Economic Outlook pp. 87-8) 翌年 George 三世崩御の爲め議會解散せられ、Ricardo は同選舉區より再選せられ、その病没せる一八二三年九月十二日に及べり。此期間に於て Ricardo は甚だ勤勉なる議員にして、議場に於て發言せると長短合して百二十六回、その記録は Hansard の百七十七欄を充む。採決の記録は不完全なれども、一八一九年二月二十一日より、一八二三年九月十日に至る期間に於て Hansard の記録に残れる小數二百三十七回中百六十六回中には

Ricardo の名を發見し、同じく九回の多數中八回に其名ありと云ふ。(Cannan, p. 88) 彼は自由黨には屬せざりしも、一般的政治問題に就ては常に議員中の最も自由主義的なる分子と行動を同うせり。政治上の改革に於て彼の最も熱心に主張したるは投票者の自由意思を尊重する爲め、無記名投票を採用するの一事にして、一八二三年四月二十三日稍々長き演説を試み「無記名投票の制を採用するにあらざれば如何なる議會の改革を試みることも無効なるべし」と云へり。經濟問題の範圍内に就て云へば通貨問題に關して彼が一代の權威としてその説の傾聽せられたるは固より其處ならん。一八一九年五月二十四日 Peel が兌換再開の決議案を提出するや、Ricardo は議場各方面よりの聲高き呼聲に促がされて漸く起立し、而して説を述べたる後「院の各方面よりの喧しき一般的喝采の裡に坐に復し」たる

ことを Hansard は記録せり。又同問題に就て一八二二年六月十二日 Westeの動議に反對せる演說中に於て「量は凡ての物の價值を左右す。」之は凡ての貨物に就て眞なるが「恐らく他の如何なるものよりも通貨に就て然る」事を力説せるは注意すべし。穀法問題に就ても亦彼れは屢々發言し、高き穀價が資本を國外に驅逐すべしと説明し、穀物の「引合ふ價格」remunerating priceを定めんとする企ての不合理なるを指摘し、更に農業家の窮厄は耕地面積を減少せしむべしと云ふ説に對し、彼は大膽にもその然らん事を希望すとの言明を敢てしたり。(一八二二年二月十一日) 彼は又裁判官に絹織物職人の賃錢決定の權能を與へたる所謂 Spitalfields Actsの廢止に賛成するの發言をなし(一八二三年五月九日及び二十一日其他)、木綿織物工救濟の目的を以て力織機に課税せんとの提議に對しては

その「社會の大保障たる所有權の神聖を侵害す」この理由に依て反對し(一八二〇年六月二十九日) 貧家の兒童に無償にて食物及び教育を給せんとする或提案に對しては、その人口を増加せしむるの傾向あるを理由として反對し(一八一九年五月十七日) Robert Owen の計畫に對してはその經濟學の原則と相容れざる學說の上に築かれたるものにして、彼の見るところを以てすれば社會に無限の害をなすべきものとして反對したり。(一八一九年十二月十六日) 彼は勿論不合理なる減債基金の制度に反對すると共に、有ゆる減税の案に賛成し、有ゆる増税に反對するを主義としたり。是を Ricardo の政治生活の大略とす。

一八二三年秋 Ricardo Gatcomb Park に在りしが九月耳に激痛を感じ、一度稍々輕快なりしが終に癒えず、九月十二日死す。遺骸は Wiltshire

の Chippenham に近き Hardenhuish Park に葬る Ricardo の女 Clutterbuck 夫人の居る處なり。Ricardo の病狀は Mill が Mc Culloch に與へたる書簡に稍詳かなり (Bain, J. Mill pp. 209-211) 而して Mill の悲痛はその人情に切なる一面を示し、Grote 夫人をして却て Mill 其人を尊敬するに至らしめしと云ふ (Ibid p. 211)。Ricardo は三男五女あり、その遺産七十萬磅なりしと云ふ。(Letters to Malthus p. VIII. Note)

リカルドオ年譜略

- 一六五二年 曾祖父 David Israel Ricardo 伊太利 Livorno に(?)生る。
- 一六九二年 David Israel Ricardo Estrela de Joseph Amadios を娶る。
- 一七〇二年 祖父 Joseph Israel Ricardo Amsterdam に生る。
- 一七二七年 Joseph Israel Ricardo Hanna Abas を娶る。
- 一七五〇年 父 Abraham Israel Ricardo 生る。

- 一七六四年(?) Abraham Israel Ricardo 英國に移住す。
- 一七七一年 Abraham Israel Ricardo 歸化して英國臣民となる。
- 一七七二年 四月十九日 David Ricardo 倫敦に生る。
- 一七七三年 十月五日父 Abraham 仲買人特許を得。
- 一七七六年 Wealth of Nations 出づ。
- 一七八二年 和蘭に在り(?)
- 一七八三—八五年(?) 和蘭に於て教育を受く。
- 一七八六年 父の業に従事す。
- 一七八八年(?) 二弟を伴ひ和蘭に赴く
- 一七九三年 十二月廿日 Priscilla Ann Wilkinson を娶る。
- 一七九七年 Malthus 人口論を著す。
- 一七九九年 Bath 滞在が始まづ Wealth of Nations を讀む。
- 一八〇三年 人口論第二版出づ。
- 一八〇七年 James Mill Commerce Defendet を著す。Mill を相知る。
- 一八〇八年 十月 Mill Edinburgh Review 紙上 Thomas Smith の "Money & Exchange" を評す。
- 一八〇九年 八月廿九日 Morning Chronicle に "The Price

- of Gold”と題して寄書す。次で第二(九月廿日)第三(十月廿三日)の書を送す。
- 一八一〇年 High Price of Bullion を著す。Bullion Committee 組織せらる(二月十九日)。同報告書發表せらる(六月八日付)。
- 一八一一年 Charles Bosanquet, Practical Observations 著す。Bullion Report を著す。Reply to Mr. Bosanquet を著す。High Price of Bullion 第四版を出す。Horner の決議案下院に於て否決せらる(五月十五日)。
- 一八二一三年 居を倫敦 Mill End 移す Upper Brook St. に移す。
- 一八二四年 Gloucestershire Gatoomb Park の莊園を買ふ。Malthus, Observations on the Corn Laws を著す。穀法案 提出せらる。
- 一八二五年 Malthus “Grounds for an Opinion” 及び “Nature & Progress of Rent” を著す。“Influence of the Low Price of Corn” を著す。Gatoomb Park を本邸にす。A Fellow of University College, Oxford(Sir Edward West) “Application of Capital to Land” を著す。
- 一八二六年 “Economic and Secure Currency” を著す。McCulloch 始めて書を送す。
- 一八二七年 “Principles” を著す。フランクレン、獨逸及

- び佛蘭西を訪ふ。Horner 死す。
- 一八一八年 Gloucestershire の Sheriff となる。兌換再始の討論行はる。總選舉行はる(六七月)。
- 一八一九年 株式取引所を退く。二月二十日 Portarlington より選出せられて議員となる。兌換再始。Owen's Scheme 調査委員に選ばれる。“Principles” 第二版を出す。“Economic and Secure Currency” 第三版を出す。
- 一八二〇年 Malthus “Political Economy” 出で。Malthus 佛蘭西を訪ふ。總選舉行はる。再選せらる。“Essay on Funding System” 及び “Encyclopedia Britannica” に寄稿す。
- 一八二二年 Political Economy Club 創立せらる。
- 一八二三年 On Protection to Agriculture を著す。Western の兌換再開の結果を調査せんが爲め委員會議置の動議に際し演説す(六月廿二日)。家族と共に大陸に旅行し、利蘭に於て詩人 F. da Costa に逢ひ、Geneve に於て Dumont の歓迎を受け Sismondi の經濟問題を論ず。更に巴里に於て J. B. Say, Louis Say, Destutt de Tracy を見る。
- 一八二三年 McCulloch 始めて Ricardo を見ふ。“National Bank” を作る。九月十二日耳疾の爲め Gatoomb Park に死す。遺産七十萬磅。
- 一八二四年 遺稿 “National Bank” “Parliamentary Reform” “Speech on Voting by Ballot” 發表せらる。

ウイザールの社會主義

評論梗概

三 邊 金 藏

左に記せるは Harley Withers の The Case for Capitalism の第七章に就き或る個所は比較的忠實に他の或る個所は單に其大體の意味のみを自分の拙き邦文に移して彼の社會主義に對する見解の一端を讀者と共に眺かんとしたものに外ならぬ。故に其議論の當否に就きては自分は勿論何等の責をも負はぬ者であること豫め希望して置く。

社會主義者の目指して居る社會が如何なる形態のものであるかは稍明瞭を缺いて居つて詳細には描き出されて居らぬが、併し此故を以て社會主義は單なる架空に過ぎないと批評し去るは極めて不公平であるであらう。何となれば詳細は改造の進むに伴れて次第に充たさる可きものであるのは勿論であるからである。随つて吾々

は社會主義者から其建設せんとする社會の頼つて立つ大原則が如何なるものであり而して又た其より生ずる利益が如何なるものなるかを明瞭に告げらるゝならば、其を以て足れりと思へばならぬのであるが、幸にして社會主義者中の最も明晰なる思索家の一人が、今次の戦争の始まる少し前に、社會主義の目的と、其が何故に採用せられねばならぬものであるかを語る自家の所見と、夫より生ず可しと思はるゝ利益とを簡明に説いた一冊子を公にした。フイリップ・スノウデン氏の「社會主義とサンデイカリズム」なる著作は即ち是れであるが、此權威は次の如く吾々に語つて居る。「現時の社會主義の目的とする所を一個の定式にて記述し得るとせば、其は既にシェップ博士に依り總ての社會主義者が己が目的の合理的定義であるとして承け入るゝであらう所の記述にて十分に果されて居る。曰く、社